

唐末宋初の華嚴と密教

—安岳石窟を手がかりとして—

鎌田 茂雄

一 序

安岳石刻は四川省安岳県にある。安岳県は東は大足、南は内江、西は毗樂、北は遂寧に接しており、成渝（成都—重慶）古道の要衝に位置している。北周の建徳四年（五七五）に安岳県が置かれ、唐の天寶（七四二—七五六）年間に安岳郡と改名されたが、現在は安岳県となっている。

安岳石刻の歴史は古く、玄妙觀の題記によれば、道教造像の始まりは唐の開元六年（七一八）に始まったといわれる。また仏教造像の始まりは臥仏院の題記により、唐の開元十二年（七二四）とされており、中唐から北宋（九二四—一一二〇）にかけての四百年間にわたって彫刻されたといわれる。^(一)

安岳石窟の造像には多くの勝れた特質がある。たとえば安岳石窟には唐代の完備した摩崖の臥仏造像が存在すること、静泰の『一切経論目序』があること、五代の石刻造像が多いこと、北宋時代の美麗な石刻造像があること、円覚洞にある五代時期の地藏菩薩像は中国の南方ではもつとも古いものであること、また円覚洞の地獄変も中国最古のものであること、毗盧道場の柳本尊の十煉修行図も最も古いものであること、玄妙觀などには道教の造像が多いこと、儒仏道三教融合の造像が多いことなどがあげられている。^(三)

安岳石刻には美しい造像が多い。観音洞の紫竹観音、千仏寨第五六号龕の観音菩薩、円覚洞の阿弥陀仏、華嚴洞の辨音菩薩、淨慧岩の日月観音などは美しい造像として有名である。

この安岳石刻の造像には密教の造像が多い。本攷では赤雲郷の華嚴洞、円覚洞や毗盧道場に焦点をあてて、安岳石刻における密教的な造像とその思想史的背景を明らかにしたいと思う。

二 安岳石刻の歴史と現状

安岳石刻の黄金時代は唐代中期である。その頃、臥仏院、千仏寨、茗山寺、玄妙観、雲峰寺、上大仏寺などの石窟が造営された。安岳地方が自然の石質に恵まれていただけでなく、文化的にも仏教の崇拜者が輩出した。唐の開元年間（七一三―七四二）、この地方の刺史として赴任してきた韋忠を始め、楊珪、崔克讓、黎令賓などがそれである。

清の周国頤撰の『安岳金石附志』によると、唐の開元中に造立された碑文の次の二つの碑目が収録されている。

- (1) 唐棲崖山寺讚銘序〔碑目考〕 唐開元戊辰、前刺史、楊珪、崔克讓、及房公立、失其名、今剝落、
- (2) 唐西崖禪師受戒〔碑目考〕 普州刺史韋忠撰、開元十年建、

(1) 「唐棲崖山寺讚銘序」は、唐の開元戊辰（七二八）、晋州刺史であった楊珪、崔克讓及び房公が立てたものという。棲崖山寺というのは、不明である。『安岳石刻』の卷末に収録されている「安岳石刻分布図」を見ても棲崖山寺は見当らない。

(2) 「唐西崖禪師受戒序」は、開元十年(七二二)、晋州刺史韋忠が撰したものである。『唐書』卷七十四上、表第十四上の「宰相世系四上に、東眷韋氏の系譜が載っているが、その子孫は閔公房と称した。その最後に「忠、晋州刺史」とあるのが韋忠である。西崖禪師については不明である。あるいは棲崖山寺に住したのでかく呼ばれるのであろうか。

『安岳石刻』によると、安岳石刻の最古の造像題記は唐の開元十二年(七二四)といわれ、その他、唐の開元、天宝、咸通、天復、五代の天成、広政、宋代の端拱、紹聖、崇寧、大觀、淳熙などの年号の題記があるという。これによれば西歴七〇〇年から一一一〇年(北宋の大觀四年)に至る四百年間に開鑿されたことがわかる。次に安岳石刻の重要な仏洞について『安岳石刻』によりながらその概略を述べよう。

円覚洞

円覚洞は安岳県城の東二華里の雲居山の上にある。唐宋時代の摩崖造像一〇三龕、大小造像一九三三體、碑刻題記二十五、及び唐代の仏塔がある大きな石窟である。

円覚洞を代表するのは西方三聖である。三像の高さは七メートル前後で、中心に阿弥陀仏、左に観音菩薩、右に大勢至菩薩がある。それぞれ三造像の一つ一つが一龕に収められてあるため三つの大きな龕からなっている。三大龕の左右の壁には飛天が彫刻されている。

千仏寨

県城の西五華里の大雲山の上にある。造像のある地区は七〇五メートルの高さに達している。南北の両岩に一〇五龕があり、造像数は三〇六一體ある。そのほか摩崖浮図七、唐碑三、題記二六がある。

最大の釈迦牟尼仏は高さ六・二メートルあり、その他、多くの菩薩、羅漢、金剛力士、護法神、飛天、供養人などが、さまざまな経変を形作つてより、その彫刻は優美である。

『安岳県志』の記載によれば千仏寨摩崖造像は隋の開皇十三年（五九三）^四に開鑿されたという。千仏寨にある最も年代の新しい題記は、南宋の慶元元年（一一九五）であるから千仏寨は約六〇〇年の歳月の間に開鑿されたことがわかる。

臥仏院

臥仏院は県城の北二十五キロの八廟郷の臥仏溝にある。私の記憶では一九八九年八月二十四日に行った時には貯水湖を小舟で渡り臥仏院に行ったことを記憶している。舟が着いて上陸し水田の畦を歩くと間もなく臥仏院に着いた。長さ一華里の両側の岩壁に一三九の大小の窟龕と、一六〇〇体の造像がある。この中で最大なのが釈迦牟尼涅槃像である。この造像は一般に臥仏と呼ばれ、これによつて臥仏院という名称がつけられている。

この臥仏は全長二三メートル、頭長三メートル、肩幅三・一メートルである。頭を東に、脚を西に向け、両手は体に沿つて伸ばし、左を下にして臥せており、地上約一〇メートルの岩壁上に安置されている。釈迦仏の涅槃における超脱した状態をよく表わしている造像である。

臥仏の上半身の上部に釈迦説法図があり、その図の中には二十余人の弟子、菩薩、鬼王、力士の造像が描かれている。

臥仏龕と相對した崖壁にあるのが有名な臥仏溝藏経洞である。第四六号窟の左壁には唐の静泰撰の「一切経論目序」と「大唐東京大敬愛寺」という文字が刻されている。なお現存する刻経題記は開元十五年（七二七）、十七年、二十三年のものである。

静泰撰の「一切経論序」大正五十五・一八〇下―一八一下）は静泰の『衆経目録』の序文である。これは東京の大敬愛寺の一切経目録の序文である。この目録は麟徳二年（六六五）に完成されたものである。その内容は隋の彦琮等撰述の『衆経目録』を増補したものである。その序には次の如く記されている。

龍朔三年（六六三）正月二十二日勅して敬愛道場に於て一切經典を写さしむ。又麟徳元年（六六四）正月二十六日の勅を奉じて履味沙門十人惠槩、明玉、神察、道英、曇邃等を取り、並に翹楚にして尤も文義に閑へるものを選び、参覆量校すること首末三年。（中略）旧経論七百四十一部二千七百三十一卷を写し、又大唐三蔵法師新訳の経論七十五部一千三百三十五卷を写し、新旧を合して八百一十六部四千六十六卷を入蔵す。其れ古来より目ありて而も本なき者、合三百八十二部七百二十五卷あり。（大正五十五・一八一上）

この静泰の「一切経論目録序」が何故、四川省の安岳県の臥仏院に石刻されているかは不明であるが、石刻にある刻経題記を読むことができればその理由が明らかにされるにちがいない。これらの題記の刊行が望まれる所以である。私が訪れた時には時間がなく、これを記録することができなかったのは残念である。

なお、題記の一つには「開元二十一年臥仏院僧玄応書」と書かれている。ここに臥仏院僧玄応とあるが、玄応といえは二人の玄応を思い出すことができる。第一は『玄応音義』を書いた玄応であり、第二は宋代の漳州報勅院玄応（九一〇―九七五）である。第一の『一切経音義』の撰述者である玄応は玄奘の訳場に列したが、貞観の末、勅によつて『玄応音義』の撰述に従事した。しかし、完成に至らずして没したようである。道宣の序には、

大慈恩寺玄応法師あり、博文強記にして、林苑の宏標を鏡み、本文を窮討して、古今の互体に通ず。故に能

く源流を讎校し、時代を勘閲し、雅古の野素を剷り、澆法の浮雜を削り、通俗を悟して教を顕はし、集略を挙げて美を騰ぐ。真に文字の鴻図、言音の亀鏡といふべきなり。^五

とある。本書は現存音義中の最古のものであり、その解釈は正確で学者の宗とする所なるのみならず、また多数の古佚書、『勸学篇』、『小学篇』、『韻集』、『切韻』、『字書』等の諸書を引用している貴重なものである。

ちなみに本書は『唐書』卷五十九、志第四十九、芸文三に「玄応大唐衆經音義」として著録されている。

第一の玄応が唐初、七世紀の貞観中（六二七―六四九）に活躍したのに対して、第二の宋の玄応は十世紀の人である。この玄応の伝は『景德伝燈録』卷二四に収録されているが、彼は泉州の出身であり、漳州で活躍しており、四川とは全く関係がない。第一の玄応もまた恐らく四川とは関係がないと推定されるので、「開元二十一年臥仏院僧玄応書」とある玄応は、二人の玄応とは別人であり、唐の開元年間（七一三―七四一）に四川、安岳県で活躍した僧と思われる。

毗盧洞

毗盧洞は皇城の南五十里の石羊鎮塔子山上にある。摩崖造像四四六体、碑刻題記三十二がある。毗盧洞は毗盧洞、幽居堂、千仏洞、觀音堂よりなる。

明の万暦年間（一五七三―一六二〇）の碑文によると、毗盧洞の造像は五代の天福年間（九三六―九四四）に彫像され、その後、補刻された。毗盧洞は五代から北宋にかけての四川密教の道場であった。後述するが毗盧洞の幽居洞には四川密教の五代祖師である柳本尊の造像がある。

毗盧洞は高さ六・六メートル、幅一四メートル、深さ四・五メートルあるが、その中に柳本尊の丁煉修行図が

ある。その両側には斧や剣を持った金剛神がいる。

観音堂の中には俗称、紫竹観音がある。この観音は容貌が美しいので知られており、風流観音ともいわれる。

華巖洞

華巖洞は県城の東南五十六キロの赤雲公社の箱蓋山上にある。造像一五九体、碑刻題記二四、華巖洞や大般若洞の大窟が集中している。

華巖洞は高さ六・二メートル、幅一〇・一メートル、深さ一一・三メートルの大窟である。正面には高さ五・二メートルの華巖三聖像がある。その左右両側には高さ四・一メートルの十大菩薩の坐像がある。窟の両壁の上方には経変が描かれており、窟頂には巨大な「唵」の字が刻されている。

茗山寺

茗山寺は県城の東南六〇キロの頂新郷虎頭山上にある。正面の崖壁の上に窟龕が彫られているが、摩崖の造像六十三体がある。五メートルから七メートルの造像が八体、四メートルぐらいのものが三十余体ある。峰頂の絶壁の造像は雄偉壯観である。造像年代は北宋と推定されている。

そのほか、孔雀場には孔雀明王像があり、浄慧岩には数珠観音像、玄妙観には金剛力士像、仏慧洞には千手観音像など多くの著名な造像もある。

三 安岳石窟の密教像

安岳石刻の中で顕著なのは華嚴三聖像などの密教像が多いことである。まず最初に華嚴洞について見てみよう。先に述べたように華嚴洞は县城から約五〇キロの赤雲郷にある。下車してから石徑に浴って箱蓋山に登ると、しばらくして華嚴洞がある。その入口には「箱蓋山華嚴洞」の六字が書かれている。洞門の右側に「粧功德記」があるが、その中に、

夫古洞華嚴、乃周昭遺迹。（汪毅著『中国仏教与安岳石刻芸術』中国旅遊出版社、一五〇頁）

と記されている。周昭遺跡とは後周世宗の廢仏を指すと考えられるので、この華嚴洞は五代の北周代に雕像されたものと思われる。

華嚴洞に入ると、その広大さに驚かされる。高さ七メートル、幅、および奥行きとも十一メートル以上もあり、その中には造像が一五九体もある。まさにその大きさは大足石窟の円覚洞に匹敵するものがある。大きさばかりでなくその風格は、大足石窟の円覚洞と、安岳石窟の華嚴洞はその双壁といえる。

華嚴洞には密教造像が多い。もっとも有名なのが正面に雕刻された華嚴三聖像である。華嚴三聖像については『印度学仏教学研究』四十四卷二号（平成九年三月）において発表した。地域的にもっとも多いのが四川省なのである。華嚴三聖像の儀礼を始めて行ったのが華嚴宗第五祖宗密（七八〇―八四一）であり、四川を中心として活動したので、華嚴三聖像が四川に多いのではなからうか。

華嚴像の両側には高さ四・一メートルの十大菩薩像がある。十大菩薩は大足石窟の如く円覚洞の中にあるのが普通であるが、安岳石窟では華嚴洞の中にある。華嚴三聖像と円覚十大菩薩とが一つの洞窟内に一緒に雕刻されているのが、安岳石窟華嚴洞の特色である。『華嚴経』と『円覚経』との融合が造像において行われている。華嚴宗第五祖の宗密は『円覚経の研究に力をそそぎ、『円覚経大疏』、『円覚経大疏鈔』、『円覚経略疏』、『円覚経略疏鈔』などを著わしており、宗密においては『円覚経』がその思想形成の中心であった。華嚴洞内に『華嚴経』と『円覚経』の融合がみられることは、宗密の影響が顕著であることを示している。

円覚十大菩薩はそれぞれ異った法器を持ち頭には花冠を戴き、胸の前には瓔珞を飾り、脚は蓮台を踏んでいる。この十大菩薩の中では左側の第三尊像である辨音菩薩がもつとも優美といわれている。

諸菩薩の上の岩壁には極楽世界の図案が描かれている。長さ二〇メートルの衆妙香国である。宝池は金銀など七種の宝物から成り、池の水は清澄で八種功德水をたたえている。

安岳石窟の華嚴洞には円覚洞の十大菩薩が安置されているが、華嚴洞とは別に円覚洞という窟もある。

県城の東にある雲居山円覚洞は安岳県の遊覧地であったが、県城を出て約半時間、岩壁の間に挟まれた蜿蜒と続く石段を登ると、雲居山円覚洞が視野に入る。高くして険ならず雲中に聳えるが如くであり、そこには多くの仏龕が見える。

四川省人民政府は一九六一年、この円覚洞を保護するために碑記を建立した。この碑記によってこの円覚洞の正式の名称が真相寺円覚洞であることが明らかにされた。

この円覚洞には窟龕一〇三、造像一九三三體、碑記題記二五ある。真相寺は山の陽、円覚洞は山の陰にあった。円覚洞は僧了月が主となって造営した。その時代は北宋といわれている。十二円覚菩薩が造像されているので円覚洞といわれる。

円覚十二菩薩の形成については、すでに『印度学仏教学研究』^(E)四十七卷一号に発表した通りである。すでにその論文で述べたように円覚洞と称する洞は大足宝頂山石窟にもあり、宝頂山円覚洞と安岳円覚洞を詳細に比較検討する必要がある。安岳円覚洞の方が開鑿年代が古いと思われる。この二つの円覚洞でもっとも大きな相違点は宝頂山円覚洞には『華嚴経』入法界品の主題である「善財童子五十三参り」の浮彫があることである。

円覚洞の大きさは深さ八・五メートル、幅五メートル、高さ四・五メートルである。洞壁には二メートル余りの三世仏像があり、その両側には六体の弟子の像があるが、頭部は文革時に破壊された。

円覚の意味については、洞口に建てられている「真相寺円覚洞記」には次の如く述べられている。

仏寺の円覚に由りて、自己の円覚を知る。(中略)父子に仁あり、兄弟睦まじく、朋友あい信じ、夫婦恩あり。利は則ち義を思い、気は則ち和を思い、酒は則ち柔を思い、色は則ち節を思う。(『中国仏教与安岳石刻芸術』一六一頁)

仏教の円覚が儒教思想によって紛飾されていることがわかる。円覚洞の理念は人倫を重んじ、道徳を崇拜し、礼儀を尚ぶところにある。まさしくこれは『円覚経』の中国思想化といえよう。

円覚洞の洞外の左側に高さ七メートルの仏塔がある。

円覚洞の近くには高さ七メートルの浄瓶観音(楊柳観音)や、同じく高さ七メートルの阿弥陀仏がある。さらに右龕には七メートルの大勢至菩薩がある。

そのほか安岳石窟における密教像として見落すことができないのは、毗盧洞にある柳本尊十煉修行図や、仏慧洞に見られる千手観音像、孔雀道場の孔雀明王像などである。とくに柳本尊十煉修行図は宝頂山石窟の柳本尊道

場よりも造像年代が古いと思われるが、安岳石窟と宝頂山石窟の柳本尊像は今後比較検討し、その実態とその思想的背景を究明する必要がある。

四 唐末・宋初に活躍した四川の密教者

唐末から宋代にかけての四川を中心とした中国密教の人脈についてはほとんど不明である。『宋高僧伝』などの高僧伝類から密教的な行法や呪術を行じた人々をあげると、定蘭（一八四九―一八四九）、有縁（八三五―九〇七）、元慧（八一―八九六）、永安（一八五四―一八五四）、道賢（一九三三―一九三三）、守真（八九四―九七一）などをあげることができる。

まず定蘭は『宋高僧伝』卷二十三に収録されている唐成都府福感寺定蘭伝によつてわかる。

定蘭、姓は楊氏、成都の人である。始め屠殺を業としていたが、その非を悔い仏教に帰依、三蜀を教化した。彼は一つの伽羅を造つたが、その名を聖壽寺と称した。聖壽寺といえは大足宝頂山石窟の上方にある寺院と同じ名前である。この聖壽寺ができる前に、父母が亡くなり、供養の費用がなく、命日になる度に悲哭した。そこで青城山に入つて裸となり、蚊蚋蝨蠅をして縦しいままに膚体を吸わせ、自分の持っている体の中の財産である血を吸わせて供養した。

次に血をとつて写経し、さらに臂を煉き、耳を抜き、目を剜り、その肉で鳥獸を飼養した。まもなく歩けなくなり、人の扶けがなければ物に触れてつまずいた。

後、異人があり、掌に珠顆のような宝珠を撃げ、目の中に入れ、しばらくして瞻矚すればもとのままであった。冥々のうちにお告げがあり、南天王が師の眼球を還したのだという。遠近の人々は定蘭の神異に驚駭した。

定蘭は常に人に「吾れ聞く、『善戒経』の中、名づけて無上施となす。吾、願わくば勤行して速かに上果を求めん」と言っていた。眼球を施するのが最上の施であるというのである。

大中三年（八四九）、唐の宣宗は詔して入内して供養させるため優礼をもって迎えた。弟子の有縁が恒に左右に執事した。大中六年（八五二）二月、肩膊を焚焼しようとしたが、宣帝は年が老いたので焼身することなく務めて久長修煉するように勧めた。定蘭は宣宗の詔に従わずついに焚焼して絶命した。弟子の有縁は上表して名を易え塔を建てた。帝は覺性を諡し、塔を悟真と称した。蜀都では定蘭塔院と呼び、今に至るも香火が絶えないという。

蜀には定蘭のような焼身苦行者がいたのであり、このような精神風土をふまえて柳本尊のような密教行者が輩出したのである。

有縁

定蘭の弟子有縁については『宋高僧伝』卷十二に唐譜雲連雲院有縁伝として別に伝が立てられている。有縁（八三五―九〇七）は俗姓は馮、東川梓潼の人である。小学の年に、成都の福感寺に行き、定蘭菩薩に仕えた。師の定蘭に従って宣宗の下に随侍出入し、その多くは宮中にいた。ある朝、宣宗に召されると、帝は筆で有縁の衫背に「この童子は朕と縁有り」と書いた。そこで有縁は招請されて宣宗に仕えた。

大中九年（八五五）、白公敏中（『旧唐書』卷一六六、附白居易伝。『新唐書』卷一九同）益都（成都付近）を鎮して戒壇を開くにあたって、淨衆寺で開壇した。淨衆寺は淨衆寺無相が住した四川省の淨衆宗の拠点であった。続いて京輦（長安）において経律を聴習した。その後、身に布褐を披、手に墨敕を執り、海内に遊行し、雲水靖宗の法嗣、小馬神昭に参禅した。その為、叢林の禪者にして、礼謁しないものはなかったという。

ついで滁州（安徽省）の華山に住し、さらに南遊して武夷山に至った。乾符三年（八七六）、縉雲（浙江省処州）の竜泉大巖山に至って院を立てた。祠部に上奏して寺額を給されて竜安寺と号し、勅命によって七僧を度した。住すること十八年連雲院に移住した。太守盧約は、請うて州の開元寺の別院に入れて、四事供施した。天祐丁卯の歳（四年、九〇七）四月八日疾を示し、六月朔日に至って没した。報齡七十三、臘五十二。遺旨によって制置の揚習司空（生没年不詳）に喪務を主らしめ、寺の南園において茶毗した。火滅して舍利數百粒を得た。後、四十九粒並びに遺骨一餅を収め、石塔に収めた。晋の開運二年乙巳の歳（九四五）、文泰律師が塔碑を撰した。

有縁は前半生は定蘭に師事して四川で教化にあたり、後半生は江南において活躍した。

元慧（八一九―八九六）の伝は『宋高僧伝』卷二十三に唐呉郡嘉興法空王寺釈元慧伝として収録されている。俗姓は陸氏、晋の平原の内史機（陸機、『晋書』卷五四）の裔孫である。髻齡にして穎悟、長じて温潤、枯龜とならんことを畏れ、瘦雁とならんことを思い、開成二年（八三七）、親を辞し、法空王寺に於て清進の下で弟子となる。会昌元年（八四一）恒陽に往き戒法を納め、はじめて毗尼を習った。五台山に入り五台を礼し、奇瑞を觀た。二年、嘉禾（嘉興）の建興寺におり、志を立てて三白の法（牛乳、牛酪、白米を三白食といい、密教修行者が食するもの）を持し、五部の曇拏羅を諷誦し、臂上に香炷を爇いた。五年（八四五）、会昌の法難に遭い、権かりに在俗となって隠れた。大中の初（八四七）、ふたたび法門に入り、七年（八五二）に至って廢仏で破壊された法空王寺を重建した。また香を臂に燃し、報恩山の仏牙を供養したりした。

この中で三白の法を修したこと、五部の曼陀羅を諷誦したこと、臂上に香を燃したことが密教修行者としての面目躍如たるものがあり、元慧が九世紀の密教修行者であったことは明らかである。

次で四川より浙江省の天台山に往き石橋を渡った。咸通中（咸通十四年三月、長安の両街に詔して鳳翔法門寺の仏骨を迎え、十二月仏骨を還置した。拙著『中国仏教史』第五卷に仏の中指の骨舍利を随送し、鳳翔の重真寺

に往き、左の拇指を煉し、口に『法華經』を誦した。その指、月を躓えずしてまた生じて前のごとくであった。乾寧三年（八九六）九月二十八日、尊勝院で没した。報齡七十八、僧臘五十八。弟子端肅等、神座を奉じてこれを呉会の間に葬り、三白和尚と呼んだ。ここに三白と謂うのは白飯、白水、白塩の事である。

永安の伝は『宋高僧伝』卷二十一に唐成都府永安伝として収録されている。永安は眉州（四川）洪雅の人である。大中八年（八五四）三月中に成都に至り、府帥白公敏中に拜謁して寺額を請奏した。当時、寺額を下賜されなければ、その寺院は存立することができないので寺額の下賜を上奏しなければならなかった。勅額寺院となることが寺院の存立の必須条件であった。

永安は足跛のために肩輿にのつて至った。圍かわやに入った永安を聖壽寺の中に安置すること十日、白公敏中は僧五、六名を差し昼夜互いにこれを守って觀察させた。内外の飲食もまたほほ常人に同じであったが、衣を解いて二行（大小便か）をする意志はなかった。

司徒白公、勅額を上奏して到る日、すなわち辞して眉都に帰った。

永安もまた足跛なるにかかわらず、奇行を行ったので一種の神異者であったといえよう。

釈守真（八九四―九七二）の伝記は『宋高僧伝』卷二十五の宋東京開宝寺守真伝にある。彼は永興万年の人。俗姓は紀。郷人その孝を美となし、遂にこれを目して紀丁蘭と曰う。後漢の丁蘭は母の死後、木を刻んで母の像を造り、これに事うること生ける母に事うることくしたという故事によってこのように呼ばれたのである。なお敦煌本『父母恩重經』などにも丁蘭のことが記述されており、ちなみに大足石窟の宝頂山石窟の父母恩重經變にも記されている。守真もまた丁蘭の後裔と見なされたのである。

黄巢の乱が起ると、僖宗は難を避けて蜀に避難した。守真もまた蜀に移った。冠するに及んで、たまたま聖壽寺に遊び、修進律師の、すぐれた行迹と語の常度を越えるを見て、すなわち帯を解き冠を御し、北面してこれに

事え、十悪の中の身三、口四、すなわち殺生・偷盜・邪淫・妄語・綺語・悪口・両舌を制することができた。

守真の修学過程をみると、先ず従朗師に謁して『起信論』を学び、次の性光師に依り法界觀を伝えられ、後に演秘闍黎を礼して瑜伽教を授けられた。すべての必要を得て、みな指帰を尽すことができた。諸法に明達し、妙典を宣暢してより四十年間、怠たることはなかった。朝廷より昭信という号を賜った。当時、師号を賜わること
は最高の名誉であった。

『起信論』及び『法界觀』を講ずること、七十余遍、みな燈を以て伝え、器を用って器に投じ、法を嗣ぐ者二十許人といわれた。灌頂道場を開くこと五遍、僧尼、士庶三千余人を度した。水陸道場を開くこと二十遍、常に五更に文殊五髻の教法を行じ、夜、二更に至って西方無量寿の教法を修して阿弥陀の尊号を口称し、念仏三昧を修して淨域に生れることを期した。

宋代には『起信論』と朴順の『法界觀』の研究が盛んであり、その影響を受けて守真もまた『起信論』や『法界觀』を研究したのである。灌頂道場を開くこと五遍、水陸道場を開くこと二十遍というから密教の儀規を行ったことがわかる。水陸道場というのは水陸会のことと、不空訳の『瑜伽集要救阿難陀羅尼焰口儀軌經』、『瑜伽集要焰口施食儀』などにもとづいて盛んに行われた仏教儀礼である。当時これらの密教儀礼が修され、庶民もまた密教儀礼に接する機会があったのである。

開宝四年（九七一）秋八月九日を以て、大衆に命じて念仏せしめ、仏声すでに久しくして止めしめ、奄然として帰寂した。俗寿七十八、僧臘五十三。その月二十一日、北永泰門の智度院の側に焚葬した。その舍利光潤なるを獲て、これを供養した。

次に道賢の伝は『宋高僧伝』卷二十五に後唐鳳翔府道賢伝と題されて収録されている。道賢はいづこの人なるかを知らず『孔雀王經』（不空訳『仏母大孔雀明王經』三卷）を持諷することを毎日の習慣としていた。その後、

瑜伽灌頂の法を受け、持明（陀羅尼）の功はいよいよその感応が多かった。嘗って夜に夢みるに仏が道賢を携えて行くが、その歩歩に濃雲を踏んで行くこと牡牛に乗っているかのようなのであった。毎行幾百里行ったか不明であった。通過する地方を指して、これは摩竭陀なり、これは占波国、南印度、西印度、迦湿弥羅等の国であると言った。行きながら国の名を記し、喜びが勝えなかった。目がさめると五天の梵音悉曇語言を理解していた。

時に西域の僧が来た。葱嶺の北の胡僧は往往にして偽って五印人と称していた。道賢は語言に接すれば、相手の言うことを斥けて「汝は是れ某国の人なり」と言った。北戎南梵の人々に対してあえてこれをあざむくことはなかった。西域の道俗は、みな密藏を稟承し、阿闍黎と号していた。

長興四年（九三三）、後唐の明宗が、從厚（閔帝）をたてて帝とするに及んで、鳳翔の清泰（廢帝）明宗の第三子『旧五代史』卷四五）はその命に従わず王思同（『旧五代史』卷六五、『新五代史』卷四五）を遣して清泰を伐たしめた。清泰は城によって自ら守った。清泰は道賢に問うた。「危きこと甚だし、如何と」と。それに対して道賢は「竇八郎を召されよ、あらかじめ勝負を知るべし」と答えた。清泰は城から出て大衆を撫した。その竇八郎は甲を着し武器を持って馬前に来て迎鬪の状をなし、跳躍して甲冑を解き才を投げて走った。道賢は「これ外敵必らず降るの象なり」と。果して彼の説う通りになった。

清泰は兵を擁して東し、道賢を召して俱に京洛に入り、帝位に即いた。改元して清泰と称した。道賢は上奏して「年号佳ならず、何ぞや水清くして石見わる」と述べた。その後、二年たつて勅命を下して并州に移った。晋の高祖（石敬瑭）は天平軍をつくり、兵を阻んで自ら固め、潜かに契丹と連合して長駆して京洛に入り、清泰は自ら焚焼した。それは石敬瑭があらわれる瑞応であった。晋兵が未だ来ないうちに、道賢は先に京洛に終った。

今、兩京（開封と洛陽）に大教を伝うる者は、皆法孫であるという。

五 結 言

五代から宋代にかけて（遼金代）、華嚴と密教の融合の書が多く著わされた。例えば道賢の『顯密成仏心要集』は『大日經』と『華嚴經』との一致を説き、慧克の『密咒円音往生集』では密教と念仏との融合が説かれ、また覺苑の『大日經演密鈔』では、華嚴と密教との融合が説かれている。これらの書は多く北方において著わされた。

これに対して南方においても密教と華嚴の融合が見られる。それは主として仏教文物、すなわち造像の面において顕著であった。例えば安岳石窟の柳本尊十煉図や、大足石窟の柳本尊修行道場（九）に見られる柳本尊こそ四川の瑜伽密教の開祖である。また、大足石窟の柳本尊修行道場を造った趙智鳳も四川の瑜伽密教の法灯を継承したものである。安岳と大足の造像こそ、四川における華嚴と密教の融合の反映であるといえる。安岳や大足石窟に見える華嚴三聖像、円覺十二菩薩像、孔雀明王像、千手観音などの変化観音像などの諸像をこの目で見たならば、何人もこの事実を否定することはできないであろう。

このような四川密教が形成された背景には必ず四川省に伝播した密教があつたにちがいない。その事実を確認するために書いたのが本論稿である。本論文でとりあげた定蘭、元慧、永安、守真、道賢などの伝記を検証してみると、明らかに彼らは密教行者として活躍していたのである。四川には確かに密教の行者が存在したということである。これらの密教行者がいたからこそ四川には密教が伝えられ、密教が宣布され、密教を受容した多くの民衆がおり、それらの民衆のエネルギーが結集されて大足や安岳のすぐれた造像が生まれたのである。

仏教思想史を研究するには文献のみでは不十分である。必ず可能な限り仏教文物に関する情報を頭において思想史を考えなければならぬことを痛感する次第である。

注

- (一) 汪毅『中国仏教与安岳石刻芸術』（一九八九年八月、中国旅遊出版社）三頁。
- (二) 同上、四―五頁。
- (三) 安岳文物保管所編『安岳石窟』（一九八四年十月、四川省社会科学院出版社）三〇頁。本書は私が（一九八九年八月）安岳県外事弁公室より贈呈されたものである。記して感謝の意を表したい。
- (四) 同上、五頁。
- (五) 玄心『一切経音義』序、縮刷蔵経。
- (六) 『華嚴三聖像の形成』（『印度学仏教学研究』四十四卷二号、平成八年三月）
- (七) 『円覚十二菩薩の形成―『円覚経』の造像化―』（『印度学仏教学研究』四十七卷一号、平成十年十二月）。
- (八) 拙著『中国の仏教儀礼』（東京大学東洋文化研究所、一九八六年三月）。
- (九) 拙稿『宝頂山石窟における父母恩重経変相図をめぐって』（『国際仏教学大学院大学紀要』第二号、平成十一年三月）。

Summary

Hua-yan and Mi-jiao in the Late Tang and Early Song Dynasties: Getting on the Track of the An-yue Cave

Shigeo Kamata

The An-yue cave which was excavated from the 6th year of the Kai-yuan period of the Tang dynasty (718) and throughout the Northern Song dynasty (924-1110) is widely known for its sculpture of the lying Buddha, mentioned in the *Yi-qie-jing-lun-mu-lu-xu* and in other sources.

In section (2) "The history and the present state of the An-yue cave", I first referred to the local officers who cooperated and assisted the image-making projects. I then introduced the history and the present state of Yuan-jue-dong, Qian-fo-zhai, Wo-fo-yuan, Pi-lu-dong, Hua-yan-dong, Ming-shan-si, etc.

In section (3) "Mi-jiao images in the An-yue cave", I considered the conciliation of Hua-yan (Avatamsaka) and Mi-jiao (Tantra) paying attention to the images of the three Hua-yan sages and the twelve Yuan-jue Bodhisattvas.

In section (4) "Mi-jiao monks of the Si-chuan province active during the late Tang and the early Song dynasties", I described Mi-jiao monks of the late Tang dynasty and the early Song dynasty in Si-chuan. Based on materials such as the *Song-gao-seng-zhuan*, I referred to Ding-lan, Yuan-hui, Yong-an, Shou-zhen, Dao-xian and to other monks, and clarified particularly the aspect of them being active as Mi-jiao ascetics.

In section (5) "Conclusion", I emphasized that in research on the history of Buddhist philosophy, it is valuable to collect information on the spot about Buddhist monuments and art works.